

巻頭言 続くといいな、続いてほしいなあ

日本教職員バドミントン連盟会長
関場 武



松尾芭蕉の「奥の細道」出立時の句に「行く春や鳥啼き魚の目は泪」という句がある。これは旅の終りに大垣で詠んだ「蛤のふたみに別れ行く秋ぞ」と対応させるために後から付け加えたものとも言われるが、この句を目にした時以来、小生はここで言う「魚の目」とは、あの足の裏に出来る泪（=涙）が出るほど痛い「ウオノメ」のことだと思っている。これから奥の細道の長旅に出かける芭蕉が、「歩き廻るとまたあのとでも痛いウオノメが出来るなあ、でも絶対行かねば」という一大決意を詠み込んだものに違いないと、出鱈目な解釈をしている。…そんなバカを言っているせいか、小生近年ウオノメにしばしば悩まされている。

ごく最近のことであるが、知らない町の法務局に出かけたことがある。書類の遣り取りは郵送で済まして貰えることになり、切手が必要ということになった。郵便局は駅の向こうですと言われたが、土地勘が全く無い新興住宅街。歩き出したものの、不安がつのるばかり。尋ねたくても行き交うひとも居らず、ウオノメとガタが来て痛む左膝をなだめながら、よろよろと歩いて行ったところ、やれ嬉しや、小学生の男の子たちが十数人、ゴム毬で楽しそうに野球をし、小学4年生くらいの女の子が二人、ナイロンシャトルを打ちあっている小さな公園に行き当たった。

頃は花粉症の時節。大きなマスクをし帽子を目深にかぶり眼鏡をかけたよれよれの老人。如何見ても不審人物。怖がられると思ったが、その女の子達に訊いたところ、「あのスーパーの横を通って右に行ったところですよ」と明るく親切に教えてくれた。ああ良かった変質者に思われなくてと礼を言って、再びのろのろと歩き出したところ、その子たちが追いかけて来て、「私たちも一緒に行きます」と言って付いて来てくれた。たぶんよぼよぼの老人が足を引きずって歩く姿を見て、大丈夫かなと心配してくれたためと思うが、「おじさん、何処から来たの？ここ初めて？」「うん、そう」等と会話をしながら進み、程なく道を隔てた郵便局のまん前に到着。「あれですよ」と指さし、「横断歩道気をつけて渡って下さいね！」と、まさに至れり尽くせりの案内。花粉症とウオノメで涙目になっていた小生、涙がこぼれそうになるのを堪えて最敬礼をした次第である。

…長々と私事を綴ってしまったが、言いたかったのは、案内役を買ってくれた女の子達が、見ず知らずの老人に対して心底親切であったということである。そしてその子達が、小生にとって懐かしい野外でのバドミントンをしていたということである。競技となるとルールに従うくせに、一歩外に出ると日常生活のルール、慣習・約束事には無頓着。例えばトーナメントバッグを背負ったまま電車やバスに乗りこみ脇眼も振らずスマホをいじっている輩が如何に多いことか。そういう中で彼女たちの純真さが身に沁みただのである。（勿論小生の身分はあかしてない）。

今、日本のバドミントン界は桃田君や女子ダブルス陣の活躍もあり、一気にブレイク。バッグを持って歩いていると「テニスですか？」と訊かれた時代から半世紀近く。やっとおモテの世界に出て来た感じである。願わくはこのブームが東京オリンピック・パラリンピックまでの一過性のものでなく、続いて行ってほしい。そしてあの子たちも、あの時していたバドミントンの楽しさを、ずっと忘れないで居てほしいし、親切な心をずっと持ち続けてほしい：そう思うのである。ともあれ、それらを含め牽引して下さるのがJEF会員の皆様方。息長いご指導をよろしく御願ひ申し上げる次第である。

目 次

巻頭言

令和元年度・2年度役員一覧

第57回大会 研修会報告

平成30年度全日本総合選手権大会レポート

第8回全日本教育系学生選手権大会

追悼 第3代理事長 小泉直坦氏 / 表紙の人